International
Forum for
Design Research

1973/1989 ICSID会議と Design Yearが残したもの

WDO世界デザイン会議東京2023 関連シンポジウム

2023年10月に東京で開催される「WDO世界デザイン会議」を前に、
1973年そして1989年に日本で開催された「ICSIDデザイン会議」と、
それを核に展開された「Design Year運動」が、日本のデザインの発展
に果たした役割を検証する。

主　催　一般社団法人 国際デザイン研究フォーラム
WDO世界デザイン会議東京2023 実行委員会
共　催　デザイン振興政策アーカイブ・プロジェクト
日本デザイン学会プロモーションデザイン研究部会
東京ミッドタウン・デザインハブ

開催日時　2023年7月16日 日曜日 午後2:00–5:00（交流会あり）
開催場所　東京ミッドタウン・デザインハブ内
「インターナショナル・デザイン・リエゾンセンター」
東京都港区赤坂 9-7-1 ミッドタウンタワー 5F
参加無料、Youtube Live配信あり
お申し込み　https://icsid1973-1989.peatix.com/

青木史郎

田中一雄

黒田宏治

藤本清春

諸星和夫

山村真一

西野輝一

宮崎修二

ICSIDシンボルマーク 左より：
世界インダストリアルデザイン会議 ICSID'73 KYOTO デザイン：亀倉雄策
世界デザイン会議 ICSID'89 NAGOYA デザイン：岡本滋夫
WDO世界デザイン会議東京2023 デザイン：廣村正彰

1973/1989 ICSID会議と Design Yearが残したもの

WDO世界デザイン会議東京2023 関連シンポジウム

International Forum for Design Research

プログラム

1. 開会・挨拶

青木史郎（一般社団法人国際デザイン研究フォーラム代表理事）
田中一雄（WDO世界デザイン会議東京2023実行委員長）

2. 1973年と1989年、ICSIDデザイン会議とデザインイヤー運動の概要

「デザイン振興政策アーカイブ」に収録された関連資料やインタビューを解題しつつ、1973年と1989年の概要と運動の構造を紹介します。
黒田宏治（デザイン振興政策アーカイブ・プロジェクト／静岡文化芸術大学 名誉教授）

3. ラウンド・テーブル「1989名古屋デザイン会議への里程」

ISCIDデザイン会議誘致を担ったデザイナー、会議を企画し推進したデザイナー、そしてデザインを活用し都市の活性化を図ろうとした行政担当にお集まりいただき、当時の熱気を熱く語っていただきます。

藤本清春：道具学会会長／元 株式会社GKデザイン機構 副社長
栄久庵憲司氏とともに'89ICSID会 議誘致・企画等を主導。
世界デザイン博覧会のプロデュースの一翼も担う。

諸星和夫：ICSID世界デザイン会議1989名古屋の実行委員長
トヨタ自動車株式会社デザイン本部 のデザイナーとして、
国内外で約40年間にわたりカーデザインに携わる。

山村真一：株式会社コボ 会長
名古屋を拠点に活動する総合デザインコンサルタント。デザイン会議開催にむけて、開催地名古屋のコーディネーター役を務めた。

西野輝一：株式会社国際デザインセンター 代表取締役社長／前名古屋市経済局長
名古屋市役所において、世界デザイン博覧会、ユネスコデザイン都市などの事業を担当した。

4. 対談「国際化を希求した時代とデザイン」

1973年と1989年、世界的にも、また日本にとっても転換点となった年です。当時、通商産業省でデザイン行政を担われた行政官と、日本産業デザイン振興会の実務担当者により、デザイン会議とデザインイヤーを俯瞰します。

宮崎修二：元通商産業省検査デザイン行政室長（1993デザイン奨励審議会答申策定時）一般社団法人高度技術社会推進機構／TEPIA顧問

青木史郎：元 財団法人日本産業デザイン振興会89デザインイヤー推進事務局
一般社団法人国際デザイン研究フォーラム 代表理事

5. 意見交換「今日へと引き継がれる課題」

ご参加いただいた方々とともに、デザイン会議とデザインイヤーの意義と、そこから今日へと引き継がれていくべき課題を考えていきます。

6. 閉会

開催にあたって

「WDO世界デザイン会議」が、2023年10月に東京で開催されます。WDOの前身であるICSIDが、日本で最初に開催した1973年「京都デザイン会議」から数えて50年目、また1989年の「名古屋デザイン会議」から数えても、ほぼ30年ぶりの開催となります。そこで、本年のWDO世界デザイン会議開催に先立ち、過去に開催された2回のICSIDデザイン会議と、それを核に展開されたデザイン啓蒙運動Design Yearを振り返り、それらが日本のデザインの発展に果たしてきた役割を検証しておきたいと考えました。

日本は、インダストリアルデザインのもたらす効果効用をいち早く理解した国の一つです。政府もこれ を推奨、日本企業も積極的に導入し、活用を図ることで、国際市場において高い評価を得る商品を次々に 生み出してきました。日本にすっかり定着したインダストリアルデザインは、日本の産業の発展と生活の質的向上に大きく寄与してきました。その里程の中で、2回の「ICSIDデザイン会議とDesign Year運動」は、いかなる役割を果たしてきたのでしょうか。

1973年は、インダストリアルデザインへの理解を促しました。また1989年では、様々なデザイン領域の融合や地域への広がりなどが図られています。デザインの社会化という側面からみれば、「ICSIDデザイン会議とDesign Year運動」は、想定以上の成果を挙げ得たと思います。しかしその反面、これによりデザイナーの職能意識が向上したとも、企業におけるデザイン活動がより一層進展したとも聞きません。また、日本デザインの国際的なアピールの機会となりましたが、それはICSID の周辺に留まっていたようにも見受けられます。

過去2回の「ICSIDデザイン会議とDesign Year運動」は、決して片手間的に開催されたお祭りではありません。1973年も1989年も、日本のデザイン界がその想いを込めて、精一杯の準備を重ね、全力を挙げて取り組んだ、画期的なデザイン運動だったのです。それは、デザインの社会化をもたらす起爆剤とはなり得ました。しかし、その想いを充分に広げられたとは言い難い側面も多々ありました。その経緯を掘り下げれば、当時は実現できなかった要因、そして今日に連なる課題が、宝の山のように発見できるのではないかと思われます。

そこで「ICSIDデザイン会議とDesign Year運動」について、当時の熱気を覗うことができる「場」を作りたいと考えました。1973年のそれは、もはや歴史の1ページとなってしまいましたが、1989年に開催された「名古屋デザイン会議」については、当時活動を担われた方々の証言を直接お聞きすることができます。またこの会議を核として展開されたデザインイヤーについて考えることで、より巨視的な視点から、これらのデザイン活動を俯瞰することもできそうです。

このシンポジウム「1973/1989 ICSID会議とDesign Yearが残したもの」は、ICSIDデザイン会議を誘致したデザイナーと、それを運動へと展開しようとした賛同者の方々が、この会議を契機として、日本とデザインに何をもたらそうとされたかをお聞きすることから始めます。そしてそこから、今日的なデザインと社会の課題を引き出していきたいと思います。

「京都デザイン会議」から50年、「名古屋デザイン会議」から30年余。むしろ時間を経た今日であるからこそ、時代を俯瞰的に捉え、適切な評価をおこなうことが、できるのではではないでしょうか。